

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

vol.16 2022年7月28日発行

巻頭言

『平和を目指して』

勝田 茜（国際リハビリテーション研究会事務局、
姫路獨協大学医療保健学部）

〔巻頭言〕
『平和を目指して』
勝田 茜

〔特集〕
『ベトナムで活躍する
JICA海外協力隊[前編]』
中島涼子
福崎聖子

〔連載〕
『山口高橋の研究万華鏡』
『国際リハ領域における
研究倫理と倫理審査』
高橋恵里

〔コラム〕
『世界のめがね』
『モルドバで思うこと』
大室和也

〔お知らせ〕

事務局として皆様には総会や年会費のご連絡をさせていただいております。そのため、まだ直接お会いしたことはない会員の方とも、すでに「知り合い」のように感じている部分があります。メールやオンラインだから「繋がった」ご縁もあるかと思いますが、出来れば、いつか皆様と直接お会いできればと思っております。そして、その日があまり遠くないことを願います。

私は、2016年3月末にドイツ国際平和村（FRIEDENSDORFINTERNATIONAL）での活動を終え帰国しました。帰国後、「日本で何ができるか」を模索していた私にとって、国際リハビリテーション研究会の発足は魅力的であり希望でした。研究会が催すものへの参加、そこでの人との出会いは私に様々なヒントや仲間を与えてくれました。

人と出会い繋がることは、その人を含めた環境や地域へ関心を高めると実感しております。2022年に入ってから、世界中から心痛むニュースが届きます。大切な人が住み慣れた地域で健康に安全な日々を送るために、出来ることを考える毎日です。国際リハ分野に携わる皆さまには、大切に想う人や地域、国が世界中に存在していることだと想像します。人との繋がりによって、大切な人や国が広がっていくこと、それが平和構築の一助になるのではないかと思います。そのような期待も込めて、研究会での出会いや繋がりが深く、広くなることを願います。

[特集] ベトナムで活躍するJICA海外協力隊

～ コロナ禍を経験したお二人が目標とする「楽しいリハビリ」[前編]～

中島涼子(なかしま りょうこ)さん
2021年度1次隊 ベトナム 理学療法士



福崎聖子(ふくざき きよこ)さん
2021年度5次隊 ベトナム 言語聴覚士

ベトナム派遣中のJICA海外協力隊
(以下:協力隊)のお二人にインタビューを行い、新型コロナウイルスによる影響、ベトナムの様子や現地での活動、今後の抱負などお聞かせいただきました。本号では前編として、協力隊参加のきっかけから派遣に至るまでを掲載します。

インタビュアー：編集担当 古川雅一

※以下：中島→中島、福崎→福崎、古川→古川



1) 協力隊に参加したきっかけは??

中島：海外旅行が好きですが、特にカンボジアの訪問がその文化や生活環境の違いなど印象に残っています。そして東南アジアの国に関心を持ち実際に住んでもっと知りたいと思うようになったのがきっかけです。また海外に住むのであれば自分の好きな理学療法(以下:PT)の仕事をしたいと思いました。色々調べましたがJICAは特に危機管理が徹底されており安心・安全を感じたため応募しました。

古川：派遣国はベトナムですが第一希望でしょうか。

中島：そうです。カンボジア近隣の東南アジアの国であることに加え要請内容に魅力を感じました。

古川：ありがとうございます。福崎さんはいかがでしょうか。

福崎：小学生の時に地理の先生より途上国について沢山教えていただいたのが最初に海外へ関心を持つきっかけでした。大学生の頃にフィリピンへスタディツアーに行く機会がありました。スラム街や農園の労働者問題についてインタビューを行い、自分にも何かできるのではないかと関心が高まりました。その後協力隊の説明会に参加しましたが、その時は技術や経験がないため諦めました。卒業後、しばらく働いたのち、言語聴覚療法(以下:ST)を学ぶため養成校へ入学しました。養成校で中国へJICAにて派遣されていた先生と出会い海外への気持ちを思い起こしました。資格を得てからもその思いは大切に持ち続け、経験を積み協力隊に応募をしました。当初はチリへの派遣が予定されていましたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受け延期・任地変更となり、ベトナムへの派遣となりました。



【語学教室のアクリル板】



【間隔を空けての昼食】



【冬の二本松訓練所】

2) コロナ禍による待機期間中の「想い」やその間の活動について

中島：2020年7月に訓練を行う予定でしたが延期となり辞退をするか迷いました。仕事はどのようにするのか？待ってまで行く意味があるのか？他の手段でも良いのではないかなど悩みましたが、自分の好きなPTで活動したい思いは諦めきれず待機を選択をしました。9か月遅れて訓練が開始し2021年11月の派遣となりました。

福崎：私はチリへの派遣が決まり2020年9月から訓練を行う予定でしたが、退職の手続きを行う予定でしたが、派遣が延長となった際に職場のご厚意で派遣時期が確定となるまで勤務を継続するご提案をいただきました。そのため仕事や生活に困ることはありませんでしたが、気持ちの維持は課題ではありました。今後どうなるのか？考えてもわからないので考えないようにしていましたが、やはり派遣再開が中々決まらないことに少し辛さを感じていました。ただコロナ禍でオンラインが普及したのでそれを利用し高次脳機能障害の認定を取得しました。偶然ですが今回の活動で必要な内容でしたので、待機期間も悪いことばかりではなかったと感じています。

古川：中島さんは待機期間中に何か活動をされていたのでしょうか。

中島：ご縁があり訪問リハビリの非常勤として働く機会がありました。訪問リハビリの実践経験が無かったので福崎さんのお話をお聞きし、同じように良い部分もあったと感じました。

3) コロナ禍における派遣前訓練の様子について

中島：訓練期間は2021年4-6月で二本松訓練所でした。2週間、東京で隔離下での経過観察期間を経て入所しました。訓練所の生活に関しては、お風呂場の使用人数制限や食堂の対面にならない座席配置と左右アクリルボードの設置、手袋使用や消毒など様々な感染対策が行われていました。また2名以上での外食は禁止でした。

福崎：私は2022年1-3月に訓練を受けました。生活面に関しては中島さんの時期と同じですね。語学の授業はコロナ禍の影響が大きい印象を受けました。ベトナム語は発音が非常に重要で口の動かし方に注意を払う必要がありますが、マスクでその動きの確認が難しい状況でした。東京での経過観察期間中はZoomで授業が行われていましたが、オンラインだとマスクが不要ですので利点の一つであるように感じました。

【東京 待機施設からの景色】



「次号（2022年10月28日発行予定）では、ベトナムの様子、配属先と活動について、今後の抱負などについて掲載します！実際の現地の様子をお伝えいたします！どうか次号の内容にもご期待ください！」

【連載】 山口高橋の研究万華鏡*

「研究に興味があるが、何をすればよいのか分からない…」という声にお応えし、気まぐれに研究について綴ります。

『国際リハビリテーションにおける研究倫理と倫理審査』

私たちは研究を行う上で研究倫理を遵守しなくてはなりません。国際リハビリテーション領域で多く行われている調査やインタビューを手法とした研究は、侵襲を伴うこともある介入研究ほど危険性はないものの、様々な質問や行為が参加者の身体的負担のみならず心理的負担を生じないかについて注意深く検討した上で計画する必要があります。特に、国・文化・立場の違いが参加を強要するものや、負担を生じる・不利益をもたらすものとならないように注意する必要があります。

また、研究開始に先立ち研究倫理審査を受ける必要があります。日本国内で行う研究については、研究者の所属機関に加えて研究実施機関で審査を受けることが一般的です。諸外国において研究実施する場合は、特に中低所得国では倫理審査の仕組みが整っていないことや、倫理審査委員会が設置されていないことがあります。実際の倫理審査を受ける手続きについては、対象国の所属機関（ある場合）、JICA事務所（JICA所属である場合）、現地大使館などに相談すると良いようです。対象国の倫理審査の仕組みや許可の取得方法が明らかになったら、日本国内の所属機関（ある場合）もしくは共同研究者（いる場合）の日本国内の所属機関の研究倫理委員会に加えて、対象国の研究倫理委員会において審査を受けると良いですね。

徐々に諸外国との往来が再開されています。各地で研究活動が行われることを期待しています。研究成果が得られた方は、学術誌『国際リハビリテーション学』への投稿も是非ご検討ください！

（国際リハビリテーション研究会事務局、東北福祉大学健康科学部リハビリテーション学科、高橋恵里）

古川：東京での経過観察期間中の様子について、さらに教えていただけますか。

福崎：授業以外にも24時間継続して利用できるフリールールのZoomがありました。人と会わない状況で精神的負荷も考えられますので対処がされていると感じました。Zoomで集まり皆でご飯を食べたりしていました。

中島：私の頃はまだ語学やフリールールのZoom対応はありませんでしたが、ある隊員が自らZoomを立ち上げてくださり交流をすることができました。オリエンテーションはZoomが使用されていました。また別途ベトナム語の課題があり、それを実施していました。

福崎：経過観察期間をより良くするためのJICA担当者様の取り組みをすごく感じましたね。

中島：改善すべき点については私たちもJICA担当者様よりアンケートで意見を求められていました。

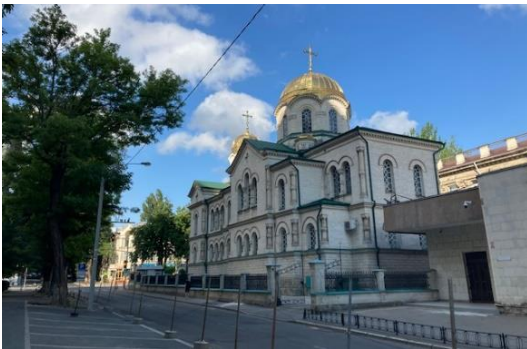
[コラム] 『世界のめがね』

[モルドバで思うこと]

大室 和也

(国際リハビリテーション研究会理事、
認定NPO法人 AAR Japan [難民を助ける会])

世界中で活動を展開している会員
のめがねを通した世界の姿を 各号
お届けします。今回は、
モルドバからです。



ウクライナへのロシアの侵攻
が始まって4か月が経過しまし
た。国民の3人に1人が避難を
余儀なくされる大規模な人道
危機が発生しています。国際
リハの関心分野である障害の
ある人の状況も、少しずつわ
かってきています▼



「アパートの上階に住んでいるのでサイレンが鳴りエレベーターが止まるともう逃げられない」「物資が不足していて必要な薬も手に入らない。見つけてもとても高い」「公的な社会サービスが停止しているので障害のある子どもに24時間つきっきりになっている」など、様々な声がきかれています▼私は今ウクライナの隣国モルドバ共和国に来ています。

モルドバの首都は、よもや隣の国で惨劇が起こっているとは思えないぐらい平穏です。しかし先日ウクライナからこられたばかりの方とお話すると、「警報アラートが一切ならないので大変リフレッシュできている」とのこと。やはり深刻な状況が続いていることをうかがわせる発言がありました▼この人道危機において私たちは何ができるのか、思考を止めてはなりません。

[お知らせ]

【国際リハビリテーション研究会第6回学術大会】

テーマ：国際リハビリテーションの新たな可能性 内なる国際化への貢献を目指して

日時：2022年11月13日（日）10:00～16:30

会場：国際デザインセンター セミナールーム（愛知県名古屋市中区栄3丁目18-1）

参加費：会員1,000円 非会員2,000円 学生1,000円

一般演題募集中！ <https://sites.google.com/view/jsirac/>

参加申込受付中！ <https://forms.gle/v2mJ5garXAnb3Lwh8>



参加申込



学会HP

【学術誌『国際リハビリテーション学5巻1号』投稿論文受付中】

投稿締切：2022年8月28日（日）

投稿規定については編集委員会にお問い合わせください journal.jsir@gmail.com

編集後記

インタビューでは今までの協力隊員とは異なるコロナ禍の訓練の様子をお聞きすることができ非常に興味深く感じました。次号にてお二人の活動内容や目標について配信させていただくことを楽しみにしています。（古川雅一）

コロナ禍における制限された環境やその対策、工夫された派遣前訓練の貴重なインタビューを聞くことができました。そして熱い想いや行動し続ける姿勢に感動しました。そういった想いや繋がりが巻頭言の通り、「平和構築の一助」と編集しながらも感じ、会員様へ繋ぐ大切なNewsletterだと思いました。次号も楽しみです。（三田村徳）

事務局 編集担当

古川雅一（仙台医健・スポーツ専門学校）

長田真弥（姉ヶ崎ヶアセンター）

三田村徳（東北医科薬科大学病院）

大西海斗（コーエイリサーチ&コンサルティング）

高橋恵里（東北福祉大学健康科学部）

山口佳小里（国立保健医療科学院）

【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/>

【お問い合わせ】国際リハビリテーション研究会事務局 jsir.office@int-rehabil.jp

【JSIR HP】

